

男性保育者に対する意識

—女性保育者・保護者の意識から—

○ 菊地 恵子

菊地 政隆

(船堀中央保育園・淑徳大学)

(聖徳大学院・淑徳文化専門学校)

1 はじめに

近年、女性の社会進出や、最近の経済事情あるいは、男女雇用機会均等法の施行などにより、女性の就業も増え、結婚しても仕事を続ける人が増加している。都市部では待機児解消のため保育施設の増加が叫ばれている状況であり、一方保育所はこれまでの役割より拡大をし、新たな保育ニーズに応えるため、地域社会に開かれたものと変化しつつある。その変化の一つとして、社会の性役割観の揺らぎと共に、男性保育者の認識も高まってきている。しかし、男性保育者に関する研究は数少なく、現在の保育界に求められている課題である。

以前、子育て(養育)は「男は仕事、女性は家庭」の性による役割分業意識と「3歳までは母の手で」という母性神話などから母親が子どもの発達促進に適していると言われていた。しかし近頃の母性研究から、子どもの0歳から7歳までの乳幼児期における身体、認知や精神の発達は、母親の就労の有無や就労形態に左右されない事が明らかになっている。確実に現代の性役割分業の境界線は消滅しつつある。

現在、保育の現場においても11時間開所、延長、夜間保育実施に伴い、今までの女性のみ環境ではなく、両性存在する、家庭的な保育所が求められている風潮にある。男性保育者の人数は平成10年に1870人を超え着実に増加している。しかし、保育士全体からみれば0.8%である。

昨年度の第53回日本保育学会の堀・加藤の発表によれば、72か園の保育所の施設長に行った調査において、男性保育者が保育所に必要の設問に対し、40%が必要であり、15%が不必要であると回答している。未だ保育所の施設長の意識は、伝統的性役割観にとらわれる部分もうかがえる。

では、現場で実際に保育する、女性保育者、保育所を利用する保護者の男性保育者に対する意識は、どのようになっているのであろうか。

本研究は、保育所で勤務する女性保育者、保育所を利用する保護者の、男性保育者に対する意識を明らかにする。

2 研究方法

(1) 対象

東京、千葉、京都、佐賀、香川、福岡、大分、福井の保育所28か園の女性保育者(292名)、保護者(314名)合計606名を対象に行った。

(2) 調査内容

質問紙調査にて行った。質問項目は、保育者に対しては、「男性保育者と仕事をしたいか」、保護者に対しては「男性保育者が保育園にいた方がよい」について、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、の3件法で行い、また男性保育者に対する意見を自由記述にて調査した。

(3) 調査時期

2000年10月～11月上旬まで。

保育所に郵送または持参で依頼した。

(4) 調査方法

保育者・保護者の調査は郵送、持参により341枚配布し、292名から回答を得た。回収率85%であった。保護者は371枚配布し、314名から回答を得た。回収率84%であった。

3 結果

①保育者の「男性保育者と仕事をしたいか」の結果を図1に示す。

男性保育者と仕事をしたいと回答した女性保育者は53%であり、半数を超える結果となった。男性保育者と仕事をしたくないと回答した女性保育者は9%と1割に満たない結果であった。

②保護者の「男性保育者が保育園にいた方がよい」の結果を図2に示す。

男性保育者が保育園にいた方がよいと回答した保護者は89%であり、約9割の保護者が必要であると回答している。また男性保育者が保育園に必要ないと、回答した保護者は3%であった。

図1 男性保育者と仕事をしたいか

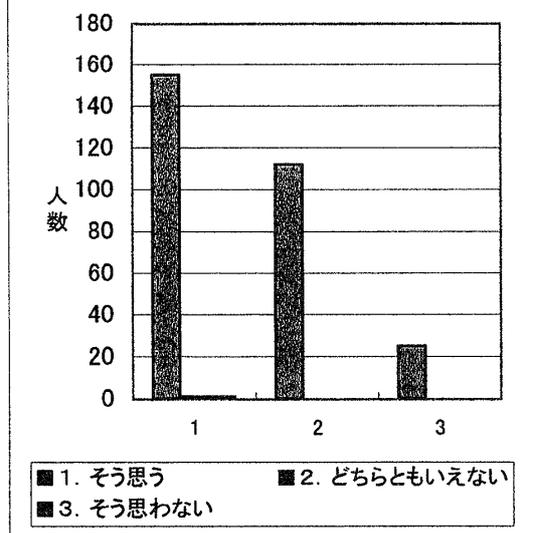
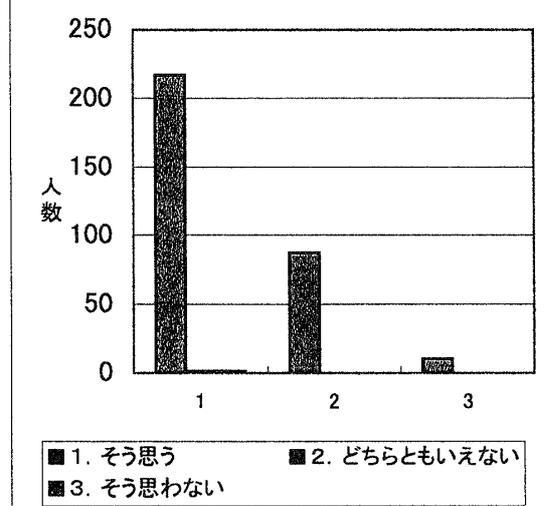


図2 男性保育者が保育園にいた方がよい。



4 考察

この結果からも男性保育者に対する意識は、非常に好意的であり、男性保育者に対し、男性保育者が保育所にいるのは、自然であり、当然という認識が育ちつつある。

保育者の意見は、自由記述をあげると、「女性保育者が母親役とすると、男性保育者は父親役として、クラス又園全体がより家庭的になると思います」など、役割意識が感じられるが、役割を期待しての受け入れでは、問題点も出てくる。なぜなら、余りに父親役を求

めすぎ、それに程遠かったり、求める男性像が理想的である場合のギャップは大きい。ゆえに男性保育者とのこだわりではなく、自然体で保育者の一員としての位置付けが望まれる。その中で、それぞれの個性としての役割が重要となる。「男性だから」の、こだわりではなく、共に保育を担っていく職員としての受け入れが定着していくことを願う。男性保育者と仕事がしたいかよりも、男性保育者が保育所にいることに違和感がないか、その役割は性に関係なく保育士としての仕事分担を担ってくれるかという、当然の力量が問題となるが、保育現場での受け入れは必要であるとの意見が圧倒的である。

男性保育者が保育園にいた方がよいと思う保護者は90パーセントにも及んでいる。保護者は、乳幼児保育の場に家庭に近い形態や機能を求める傾向がある。自由記述からも「母親も父親も必要のように男性の保育者も必要に思う」、「父親と過ごす時間が少ないので、保育園に男性保育者がいることでよい時間になりそう」など、保育の現場をより家庭に近い場所と捉える考え方が伺え、家庭の両性的な捉え方が、男性保育者の必要性の基となっているように思われる。保育所での生活は子どもの思いを十分に発揮させ、受け入れてくれる場所であってほしいと期待し、それは家庭での母親の受け入れ方では補えない父親的な受け入れ方を望む意見が多かった。父親との関わりは、日常においては休日のみという家庭が多いこともあり、父親的な人が日常の遊びや生活面で関わっていて欲しいとの願いを、さらにこれからの保育所に求めてくることは必ず至であろう。

これまでの女性保育者のみが保育を担っている時代から、確実に男性保育者も保育の担い手の中に、必然的に求められている結果が本調査を通して明確になった。

今後保育士の仕事が社会からみて、男性にも門戸がひろげられている職業であることをもっと広く認識していったほしい。また保育現場の施設長等、採用権のある人間が、保育における男性保育者の必要性の認識をもち、男女平等の職業であることへの理解を深めていくためには、今後も一層の男性保育者の存在感や役割の意義の啓蒙は必要となってくるであろう。

本研究は、男性保育者に対する意識の研究の初歩にすぎない。今後、深く掘り下げた研究が引き続き必要である。